

立命館大学理工学部土木工学科 正会員 笹谷康之
立命館大学理工学部土木工学科 学生会員 ○和多田武文

1. はじめに

中世より和歌・俳句に詠まれ、江戸時代になると名所図会などに描かれるなどして、愛でられてきた桜の名所は、豊かな眺望点・視点場を持っていたと考えられる。

江戸後期～明治における京都・江戸の花見の名所がいかなる地形に占地されているかに注目し桜がどのような視点場、眺望点から観賞されていたのかを知り、現代の景観計画への示唆を行うため、以下の点を明らかにする。

- ①桜がどのような視点場、眺望点から観賞されていたのかを明らかにする。
- ②桜と地形との関係を明らかにする。
- ③桜の名所が持つ景観的な特徴を見出す。

2. 研究の方法

本論文の研究手法は、テキスト分析を主とする。テキストには桜・花に関する和歌及び桜の描かれた名所図会を対象とし、それらをもとに桜に関するものを抽出しデータベースを作成し分析を行った。また代表的な名所については明治時代の地形図上で考察した。

テキストには江戸後期～明治前期に描かれた江戸と京都の名所図会より桜の描かれているもの 101 枚。及び和歌においては時代的に平安時代から室町時代と幅広く詠まれた勅撰和歌集「二十一代集」34368 首より桜を詠み込んだ歌 2216 首を対象とした。

3. 和歌に詠まれた花見の名所

ここでは二十一代集より抽出した桜に関する和歌 739 首よりデータベースを作成し、それに基づき分析を行った。抽出した語は地形的要素、気象的要素、人工的要素に分類した。

表 2 では和歌から抽出された地形要素は 197 首で、そのうち山辺要素は 177 首抽出され地形要素の 90% をしめていた。

また表 3 で和歌に多く詠まれていた名所を 7ヶ所抽出できたが、それらは全て滋賀・京都・奈良の山々で

あった。このことより平安以降の貴族達は山麓の桜を楽しんでいたことが推測される。

また表 2 で和歌から抽出された人工的要素は 53 首詠まれている。そのなかでも「家」、「宿」、「庭」などの語が多く見られることにも注目できる。このことにより二十一代集において和歌を詠んでいた貴族たちは郊外に別邸を作るなどして山桜を楽し

表 2 和歌の 3 大要素

地形要素	山	90	177	20	197
	嶺、高嶺	56			
	尾、屋上	16			
	ふもと	5			
	山の端	5			
	山の辺	3			
	山のかい	1			
	谷	1			
	川、河	6			
	滝	4			
水辺	池	3	20	197	
	江	3			
	岸	1			
	浜	1			
	なぎさ	1			
	漕	1			
	雲	127			
気象的要素	風、嵐	126	282		
	霞	46			
	雪	37			
	波	17			
	雨	13			
人工的要素	朝日、曙	9	53		
	家、宿	26			
	庭	11			
	道、山道	9			
	里、山里	6			
	村	1			

表 3 和歌に詠まれた名所

名所	和歌数
吉野	185
志賀	26
初瀬	24
葛城山	20
嵐山	5
逢坂山	5
三笠山	5

しみ、各々の庭にも桜を植え楽しんで

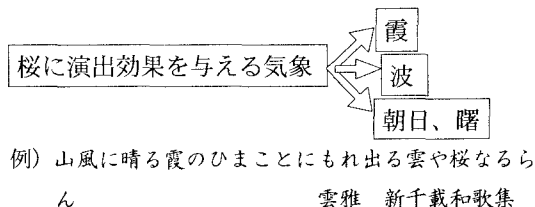
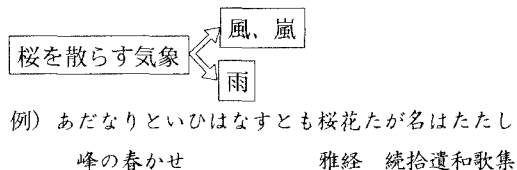
ることが推測される。

〈気象要素との相関〉

739 首より気象に関する語を含む歌は 282 首と、三つの分類のうち最も多く抽出した。またそれらの読まれ方は特徴的で桜と興味深い相関関係が見られた。



例) よし野山尾上の桜咲きぬればたえずな引花の白雲
後宇多院 新後撰和歌集



4. 名所図会に描かれた花見の名所

ここではどのような場所でどのようにして花見が行われてきたかを江戸時代に多数発行された名所図会の挿絵をテキストとして分析した。京都では 27 枚の挿絵、17 箇所の名所、江戸では 74 枚の挿絵、39 箇所の名所が抽出された。二つの対象地で抽出された挿絵 101 枚と 56 箇所の名所を元に描かれている景物を中心に列挙し、データベースを作成し分析した。

表 1 では抽出した景物のうち視点場に関するものを「眺望の良さを高める」「休憩に用いる」「花見を演出する」の 3 つのタイプに分類できた。眺望のよさを高める工夫として、さらに展望台や櫓や家のように高い位置にあることで俯瞰景を演出するもの、橋などの本来いけない場所に眺望点を作ることでビスタ景などの優れた景観を演出するもの、船などのシークエンス景観を作り出すものの 3 つに、分類することができた。

表 1 視点場の工夫

視点場の工夫	掲載図会数			タイプ
	江戸	京都	合計	
展望台	2(3%)	2(7%)	4(4%)	眺望
櫓	8(11%)	0	8(8%)	
家	6(8%)	0	6(6%)	
橋	3(4%)	0	3(3%)	
船、屋形船	11(15%)	4(15%)	15(15%)	休憩
腰掛け台	15(20%)	4(15%)	19(19%)	
露店	8(11%)	2(7%)	10(10%)	
敷物	13(18%)	4(15%)	17(17%)	演出
幕	3(4%)	3(10%)	6(6%)	
かがり火、電灯	2(3%)	1(3%)	3(3%)	

人が休憩するため設置されたものとして、越し掛け台、敷物、露店を抽出した。これらは主にリラクゼーションを演出する道具であった。

視点場の雰囲気演出するものとして幕、かがり火を抽出した。花札でもお馴染みの幕は、空間をしきり、閉ざされた空間にすることで雰囲気を高めていたと考えられる。

図 1 では特に多くの図会に描かれていた名所を代表的な名所とし、明治時代の地形図でそれらを考察し、タイプ分けを行った。

江戸の代表的な名所は江戸後期に成立したものが多く、関東平野のゆるやかだが起伏の激しい地形を利用し丘陵地の上部に占地したものも多くみられた。

京都の代表的な名所はすべて奈良時代～江戸初期に成立した名所で、江戸初期以前はおもに王侯貴族などにより楽しまれた名所であった。盆地の地形を利用し東

山、嵐山を中心とした山裾寺院に花見の名所が多く見られた。

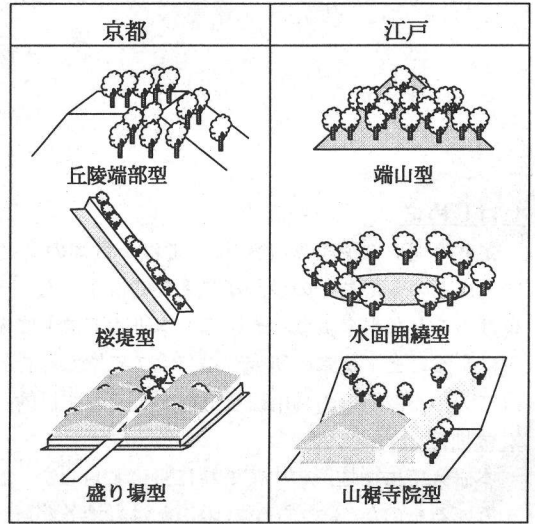


図 1 名所のタイプ

5. 終わりに

- 本研究より得られた知見は以下のとおりである。
- ① 図絵において視点場に見られる工夫を「眺望の良さを高めるタイプ」「休憩に用いるタイプ」「花見を演出するタイプ」の 3 つのタイプに分類した。
 - ② 二十一代集の歌において歌に詠まれている地形要素・地名から平安～室町時代において桜はおもに山麓に占地していることが読み取れた。
 - ③ 二十一代集の和歌において最も多く詠まれていた景物は気象要素であった。気象と桜には相関関係が見られ、桜が例えられているものとして「雲、雪」、桜を散らす要因として「風、嵐、雨」、桜に演出効果を与えるものとして「霞、波、朝日、曙」が分類された。
 - ④ 名所図絵における代表的な名所の地形を丘陵端部型・桜堤型・盛り場型・端山型・水面圍繞型・山裾寺院型の 6 つに分類し江戸の主な花見の名所は丘陵端部、京都の主な花見の名所は山裾寺院に占地していることを示した。

<参考文献>

1) 「東京の原風景」 川添登 ちくま学芸文庫 (1979)

2) 「江戸の花見」 小野佐和子 築地書館 (1992)